

18歳 父の許しを得て進学
33歳 発表した戯曲が話題となる
39歳 新聞で長編小説を連載
60歳 参議院文化委員長に

vol. 21

山本 有三

Yamamoto Yuzo

学ぶ喜びを知り、 探求し続けた作家

抱き続けた学問への思い

山本有三は1887年（明治20年）、現在の栃木県栃木市で生まれた。もともと武士だった父は、明治維新後、呉服屋で番頭をつとめた後に独立、呉服商を営んでいた。一人息子の教育に熱心で、当時はまだ珍しかった私立の幼稚園に通わせ、漢学の塾で学ばせた。有三自身も本を読むことが好きだったが、少年少女向けの本など簡単に手に入れられる時代ではなかった。

有三は、尋常小学校でも高等小学校でも成績優秀だった。その上、家計も裕福とあらば、当然、卒業後は進学できるものと思っていただろう。だが、息子を跡継ぎにしたいと考えていた父は、15歳の有三を東京の呉服店へ奉公に出す。父の思惑通りとはならず、1年も経たないうちに奉公先から戻った有三は、父に進学させてほしいと懇願するが、首を縦に振ってはもらえなかった。

状況が変わったのは18歳の時。従兄弟が跡継ぎとして見込まれたことと、母が再三にわたり父を説得してくれたことが功を奏した。有三はようやく念願になって東京の学校に進学する。英語学校を経て中学校を卒業し、高等学校の合格が決まった2カ月後、父が他界した。入学をあきらめ、一度は家業のためにと実家に帰ったものの、息子の心中を察した母の勧めで学業の道へ戻り、第一高等学校に進学、創作活動も始めた。

25歳で東京帝国大学のドイツ文学科に入学すると、仲間たちと文芸雑誌を立ち上げた。卒業後は劇団専属の作家となるも1年で退職。29歳で結婚したがほどなく離婚、早稲田大学のドイツ語講師の職を得た30歳の時、郷里から母を呼び寄せ、32歳で再婚した。



1887年、栃木県出身の劇作家、小説家、教育者、政治家。小説では『路傍の石』『女の一生』、戯曲では『米百俵』『女人哀詞』をはじめ多くの作品を執筆。子どものための本の編集にも携わる。憲法の口語化や当用漢字の制定、文化財の保護にも取り組んだ。

劇作家、小説家から国会議員へ

有三は子どもの頃、芝居好きの母に連れられしばしば観劇に行った。以来、演劇の世界に引き込まれた。初めて戯曲を書いたのは23歳で、33歳の時に発表した作品は社会の矛盾をつく内容が話題を呼んだ。戯作家としての仕事が多忙となり、36歳の時に講師の職を辞する。その後、編集長として演劇雑誌を創刊した。

一方、39歳の時には全国紙の連載で長編小説を執筆した。それ以降、度々、新聞で連載するようになり、小説に軸足を移していく。登場人物たちの波乱万丈な生き様や心情を描いた作品は、多くの人々の心をとらえたのである。とはいえ、戦争に突き進んでいた昭和初期、自由な表現はままならず、人気絶頂で連載を中止した作品もあった。

そんな時代の中でも、有三は子どもたちに心の豊かさを失わないでほしい、本を読む喜びを届けたいとの思いがあった。その思いから、子どもたちのために良い本をつくらうという志をもつ仲間とともに16巻のシリーズ本を出版した。さらに、自宅の一部を開放して、数千冊に及ぶ蔵書を地域の子どもたちが自由に読めるようにした。

58歳で終戦を迎えると、貴族院議員に選任され、その後60歳で参議院議員に当選し、文化委員長となる。憲法の口語化や当用漢字の制定、国民の祝日の制定、文化財の保護などに尽力した。

66歳で任期満了となった参議院議員を離れると、神奈川へ移り住み、古代史の研究などをしながら日々を送る。長い沈黙をやぶり、85歳で再びペンを執り新聞での連載を始めるも、未完のまま翌年、息を引き取った。学びへの情熱を持ち、社会を、人間を、探求し続けた生涯だった。

（執筆／ライター 篠田 りょうこ）